

# 大学生による授業評価の変動要因の探索

——「教育心理学」の授業評価の分析報告——

藤 沢 伸 介

AN EXPLORATION OF VARIABLES  
IN THE EVALUATION OF CLASSROOM TEACHING  
BY UNIVERSITY STUDENTS

— An Analysis of Responses in the Evaluation of "Educational Psychology" —

Shinsuke FUJISAWA

## 要 約

筆者は、「教育心理学」という科目の授業で、学生による授業評価を実施した。評定尺度法による評価と自由記述による評価を併用したが、本研究は、そのうち評定尺度法によって得られた結果の報告である。評価の観点としては、①考えさせられる授業②興味をもてる授業③理解しやすい授業④知的な好奇心が刺激される授業であるかどうかを、学生は最も重視していた。評価を高くつけた学生は教師の熱意に注目しており、低くつけた学生は教室環境に注目していた。また、筆者が強調したい授業の特長を正確に把握し、学年が上がるほど授業の評価が高くなるなど、評価はおおむね教師に好意的であった。教室環境に問題がある場合には、知的な好奇心の刺激に影響を与えることもわかった。筆者の担当する「教育心理学」の授業の課題としては、1年生の段階からいかに自発的な家庭学習を促進するかを更に検討する必要があることが再確認された。学生による授業評価の方法として、評定尺度法もかなり沢山の有効な情報が引き出せることがわかった。

Key words : 大学生, 授業評価, 評定尺度法

## 問 題

大学における Faculty Development (以下 FD と略記する) の機運の高まりと共に、学生による授業評価の問題が注目されるよう

になってきている。

筆者は、かねてより学生に文章形式で授業の感想を書かせ、授業改善の参考にしてきているが、2000年度の授業から明瞭に学生に授業評価を求める姿勢を打ち出すことにした。

これは、受講している学生に評価者意識を持たせることによって、授業を構成する当事者意識を積極的に持たせるためである。一般サービス業においては、顧客を評価者の立場に置くことによって、顧客のサービスに対する評価が高まり、企業に対する信頼度が増加し、さらにその企業の反復利用頻度が増加することが知られている。従って、航空会社にせよ、飲食店にせよ、メンバー制を採用して顧客にサービス評価を求め、サービス向上のための情報を得るだけでなく、評価者となった顧客の固定化を図る戦略が取られるようになってきた。このことを大学の授業にも応用して、授業の満足度を高めようとしたのである。

折しも、学習者の学力低下が深刻化し、大学も従来型の授業を行っていたのでは、学生の満足度を維持できないということが、数多く指摘されるようになり、大学生による授業評価までを視野に含めたFD活動が盛んになり、各大学における試みが色々と紹介されるようになってきた。

安岡高志(1999)は東海大学での授業評価の実践を紹介している。筆者は、東海大学での実践例と比較する意図もあって、東海大学で学生に配付された「授業評価アンケート」を参考にして、「授業評価用紙」を作成した。但し、東海大学の実施意図と筆者の実施意図には差があるため、完全に同一にしたというわけではない。

東海大学の授業評価用紙の書式は教員間で統一されている。そこでは各教員が独自の評価観点を2項目だけ追加することができるよ

うにはなっているが、それぞれの授業の個性が評価されにくいらいがある。更に、学生によって評価の視点が異なると思われるが、この用紙では学生による差を反映させる余地が配慮されていない。また、評定尺度法のみを採用しているために、評定の根拠や学生の要望や意見を把握できないなどの問題点が見られた。

筆者としては、せっかく評価として実施するのであるから、実施する度にそこから新しい情報を引き出したいという思いもあり、東海大学の用紙で筆者の意図に合わないものは取り去り、知りたい項目を追加するなどして調査目的を兼ねた新しい用紙を作成した。

授業の品質については、唯一絶対の理想像があるわけではないので、各教員が統一した評価用紙を使わなくても良いというのが、筆者の考えである。授業の評価を教員を比較する道具に使ったりするのであれば、統一的な書式が必要になるのかもしれないが、筆者の意図は初めに述べたように、あくまで受講者の満足度の向上であるので、それにふさわしい書式を考える方針を採った。

独自の評価用紙を作成することによって、今回筆者が得たかった情報は、次の各項である。

1) この科目と他の科目で、評価に違いが出るか。

選択科目は、自分の意思で選択が決定できるのに対し、必修科目は自分の意思とは無関係に履修しなければならないので、選択科目の方が授業満足度が高いと推測される。

2) 年度による評価の違いがあるか。

同一内容の科目は、授業運営方針が一定である限り、年度による差はほとんどなく、一定であると推測される。

3) 教室環境が著しく悪い場合、授業運営全体にどのように影響するか。

これは、2001年度やむを得ざる事情から劣悪環境で授業をすることになったクラスがあるので、これを絶好の機会とらえ、運営方法によるカバーが可能かどうかを調べた。

「教育心理学」は月曜日と金曜日に並行して開講されているが、今年度は金曜日に履修が集中したため、金曜日は通常の501番教室を使用することが、教室の収容人数の関係でできなかった。そのため学生との相談の結果、通常は授業で使用していないが全員収容可能な403番教室を、やむを得ず使用することにした。①机がない。②エアコンがない。③照明が暗い。④音響効果が悪い。⑤工事の騒音が侵入する。などの悪条件に加えて、いすの配置が授業以外の利用者によって乱されていたことが何回かあり、大学としては例外的劣悪条件（I条件と略記）で授業をすることとなった。これは授業のあり方として決して望ましい状態ではあり得ないが、結果的に教室環境の影響を調べることを可能にした。

4) 学年によって評価に差がでるか。

この「教育心理学」は、1年次に履修することが求められている科目であるため、2年生と3年生の大半は再履修の学生である。

繰り返し履修することによって、嫌気がさすと考えれば授業評価は下がるし、より学習内容の理解が深まると考えれば授業評価は上がると推測される。

5) 学生はどのような評価観点を重視するか。

これは、時代差、地域差、年齢差、授業差が多分に影響する項目と考えられる。従って結果を一般化することは出来ないが、その時に集まった受講生の特徴を把握するためには重要な情報と考えられる。

6) 総合評価が高い者と低い者は、その観点到に差があるか。

同じ授業を受けているにもかかわらず、評価が別れる背景には、学生各人の目の付け所が異なっていると考えられる。そこで、総合評価の高い者と低い者のデータを、分けて集計することによって、その観点的の違いを見ることにする。

7) 教師側が授業の特長として強調したい点は、その意図通りに、学生から高く評価されているかどうか調べる。

8) 学生の自己評価に対して、教室環境や学年がどのように影響してくるのかも、わかれば役立つ情報になると思われる。

本稿では、これらのことを調査する目的を兼ねた評価用紙を作成して、授業評価を行った結果を報告するものである。すなわち、授業満足度を高めるための方略としての授業評価であるが、同時に調査用紙を兼ねており、本論文はその調査結果の一部の報告である。評価は単なる測定と異なり、後の活動に役立っているためのものであるから、調査を兼ねてそこから得られる知見を普遍化して次の授業計画の参考にしようとすることは、本来の目的に添っており、さしつかえないと思われる。

従って、以下で述べられている調査用紙とは評価用紙のことであり、調査対象（又は被

調査者)とは評価者のことである。評価用紙は、評定尺度法の部分と自由記述部分から成るが、ここでは、主として評定尺度法の実施結果を報告する。自由記述部分で更に新しく発見したことも沢山あるが、それは別の発表の機会に譲りたい。

## 方 法

### 調査対象者及び調査時期

跡見学園女子大学の教職課程の必修科目である「教育心理学」を2001年度春学期に受講した大学生269名のデータを、主たる分析対象とする。用紙は授業中に配付して、各自家で記入するように伝え、春学期試験の当日(7月31日)に回収した。

調査結果を比較するために、跡見学園女子大学の2000年度開講の共通選択科目「心理学」の受講生91名のデータ(2001年2月9日回収)、2000年度の「教育心理学」の受講生289名のデータ(2000年7月29日回収)もあわせて利用した。

### 調査項目

質問項目は大きく3つに分け、自己評価、教員に対する評価、総合評価とし、自己評価を先に問うように配置した。これは東海大学の様式に倣ったものである。

自己評価に関する東海大学の事例は、全教員共通の問が「この授業におけるあなたの出席状況や受講態度等を総合した自己評価を示して下さい」となっており、あと2問が各教員の自由設定項目になっている。これに対して、筆者の場合は全4問とし、家庭学習までを質問に含めることとした。これは、大学の

講義科目は授業時間以外の自立的学習までも含めて単位制度が成り立っていることと、学生に家庭での自発的学習を促す効果を、用紙に持たせようとしたためである。自己評価の報告カードの効果は、トーマス(Thomas, 1976)や、福教大附属福岡中(1985)によっても報告されており、自己評価は年齢を越えて有効であることから、最近減りつつある自発的家庭学習に、少しでも学生を方向づけたいというのがねらいなのである。

以上の考えから、次の4項目を尋ねた。

- 1) 出席状況は良かったですか?
- 2) 受講態度は良かったですか?
- 3) 習得のための自宅学習はしましたか?
- 4) テスト準備は最善を尽くしましたか?

教員に対する評価項目は、東海大学の質問項目の中から余りにも基本的すぎる項目は除き、授業の特長にできるだけ注目させるように設定した。これは、新製品を開発した企業が、アンケートの形を借りて新製品に注目させたりする戦略と同一である。

筆者の授業は、①双方向意見交換型授業 ②知的好奇心を刺激する授業 ③日常の実体験と学問を結びつけて考えさせる授業 ④詳しい授業方針の説明 がその特長になっているので、ここに注目させるための質問項目を含めることによって、授業満足度を高めるようにした。

又、筆者はどの学生にも公平に接するように当然配慮しているが、一般的にはこの点が最も誤解されやすく不満が発生するものになりうるので、アンケートの不満解消機能を利用して、公平であったかどうかを尋ねる質問

を含ませた。

従って、質問項目は次の10項目とした。

- 1) 詳しい授業方針の説明はありましたか？
- 2) 授業内容に興味をもてましたか？
- 3) 説明は理解しやすかったですか？
- 4) 知的好奇心は刺激されましたか？
- 5) 学生の意見や感想を聴く努力を積極的にしていましたか？
- 6) どの学生にも公平に接していましたか？
- 7) 色々考えさせられることは多かったですか？
- 8) 教室内の雰囲気は良かったですか？
- 9) 授業に対する熱意を感じましたか？
- 10) 更にこの分野を探究してみたいですか？

この中で、東海大学の質問項目と同一のものは、2)と9)である。これらは重要でかつなかなか達成し難い項目なので、共通に含める価値があると判断したためである。

8)は教室環境に関する質問、10)は本人の関心の問題であって、直接教師を評価する項目ではないが、便宜的に教師評価の分類に入れておいた。

さて、以上の10項目は、重要度に個人差があると思われる。通常のアンケートは、すべての項目が同一比重で並ぶため、結果の信頼性を損ねることがよく指摘される。例えば、「アジア、ヨーロッパ、南北アメリカ、アフリカ、オセアニアのそれぞれの地域で、最も行ってみたい国を、1つずつ挙げて下さい」という質問の回答を集計しても、人の好みは地域的に偏ることがあるので、世界中で最も人気のある5か国が選ばれるとは限らないのである。

アンケートの持つこのような不備を少しでも解消するために、学生が記入するにあたっては、回答項目を5項目だけ選べるようにした。こうすることによって、学習者が最も重視する項目の評価が、教員に伝わるようにしたのである。又、5項目の選択状況を調べれば、学習者の重要度の判定に関する情報も得られるわけで、まさに一挙両得である。

最後に、「この授業に対する総合評価を示して下さい。」という質問を入れた。授業の当事者は教師と学習者の両方であり、どちらか一方ではあり得ない。従ってこの第三の総合評価は必要不可欠と考えた。これは東海大学の例と全く同じである。更に、東海大学の例では、教員の年代別評定平均値等が公表されているので、それとの比較も個人的にしてみたかったこともある。

評定に関しては、東海大学の例にならって5段階評定とした。5段階が適切であるかどうかについては意見が分かれるかもしれないが、中学高校で広く採用されているので回答者にとってお馴染みである上、東海大学の結果との比較考察も可能なので、そのようにした。

5段階のそれぞれは、次の通りである。

- |                    |
|--------------------|
| 5 : 強くそう思う / 優良    |
| 4 : ややそう思う / 良     |
| 3 : どちらとも言えない / 普通 |
| 2 : あまりそう思わない / 不良 |
| 1 : 全くそう思わない / 最悪  |

評定尺度法だけでは、学習者のそのままの感想や意見を集めることができないので、用

紙の下には、自由記述の欄を設けた。又、記入内容に対して返事を求める受講者も結構いるので、「ここに書かれたことに対し返事が欲しい」かどうかを尋ね、欲しい場合には面接希望か、電話希望か、Eメール希望かが選択できるようにした。自由記述欄に関する分析については、本稿では扱わない。

使用した用紙は、TABLE 2として最終ページに掲載した。

## 結果と考察

### 1) 本年度の「教育心理学」の総合評価

FIGURE 1は、2001年度の「教育心理学」に対する、学年別の総合評価の評定分布である。評定平均値は4.24であった。これは、月曜日に実施されたクラスの調査結果である。月曜日は、通常の学習環境である501番教室で実施された。(良好環境条件=S条件と略記)各人には机が用意され、エアコンが完備し、照明音響ともに良好で、工事現場の騒音もほとんど聞こえなかった。いすも固定式であるので、授業開始時に並べ直す手間がかかるとはなかった。

東海大学の総合評価の結果では、30歳代の

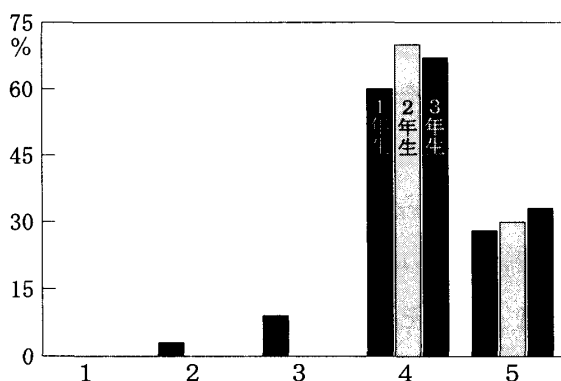


FIGURE 1 2001年度「教育心理学」(S条件) 総合評価の評定分布 (平均4.24)

教員の評定平均値が3.9で、40歳代50歳代と年齢が上がるにつれて、0.5ずつ平均値が下がっているの、それと比較すれば4を越えているのはまずまずと言えるかもしれない。

### 2) 昨年度の「教育心理学」の総合評価

FIGURE 2は、2000年度の「教育心理学」に対する、学年別の総合評価の評定分布である。評定平均値は4.23であった。昨年度も月曜と金曜に並行で2コマ開講されていたが、両方とも良好環境条件であった。昨年度と今年度は、ほとんど総合評価が等しいことがわかる。

### 3) 他の科目の総合評価との比較

FIGURE 3は、2000年度の「心理学」に対する、学年別の総合評価の評定分布である。評定平均値は4.52であった。学習内容が異なるのでそのまま比較することはできないが、この値と比べると、「教育心理学」は評価が若干低いことがわかる。同じ教員の授業であっても、科目によって変動があることがわかる。「心理学」は選択科目であるため、主として学習意欲のある者が受講しているのに対し、「教育心理学」は必修科目であるために、仕方なく受講している学生が含まれてい

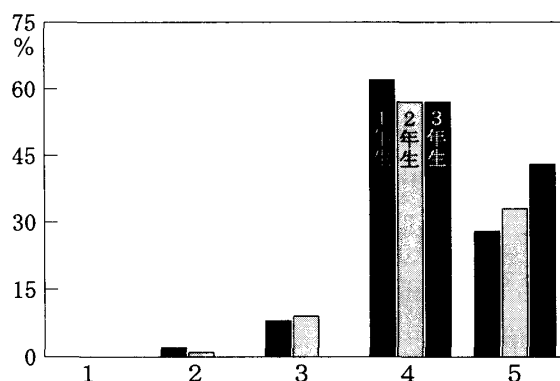


FIGURE 2 2000年度「教育心理学」(2クラス合計) 総合評価の評定分布 (平均4.23)

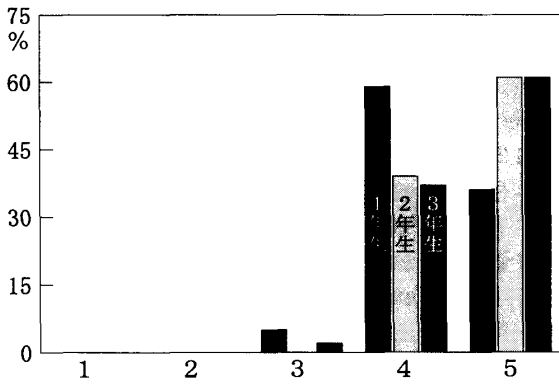


FIGURE 3 2000年度「心理学」(共通科目) 総合評価の評定分布 (平均4.52)

るのが原因であると推測される。

#### 4) 学年と総合評価

FIGURE 1 から FIGURE 3 の図で共通しているのは、学年が上がるにつれて総合評価が上がっていることである。

TABLE 1 は、各授業の学年別評定平均値であるが、どの科目も学年が進むにつれて評価が高くなっている。数値上は心理学の2年生が3年生を上回っているが、誤差範囲の差であって有意差があるわけではない。

TABLE 1 授業毎の学年別評定平均値

年度	科目名	1年	2年	3年	全体
2001	教育心理学	4.10	4.30	4.33	4.24
2000	教育心理学	4.16	4.22	4.43	4.23
2000	心理学	4.31	4.61	4.59	4.52

前にも述べたように「教育心理学」は上の学年には再履修の学生が多く含まれているので、学習を繰り返すうちに内容理解が進み、その結果評価が上がったと考えることもできるが、再履修がほとんどいない「心理学」でも上の学年の方が評価が高いという結果が出ているので、必ずしも反復効果だけではないだろう。例えば、心理学の分野は日常生活に関連したテーマが多いので、生活経験の蓄積

により理解が促進され、授業の価値が高まっている可能性もある。この件については、今後各種の研究データを蓄積していく必要があると考えられる。

#### 5) 教室環境が悪い場合の影響

次に、同一方針同一内容の授業で、教室環境が悪い場合、それは授業評価にどこまで影響するのであろうか。

FIGURE 4 は、教室環境に問題が多かった金曜日 (I条件) の受講者の評価を表している。良好条件の FIGURE 1 と比較すると、S条件ではほとんどの学生が4または5の評定をつけたのに対し、I条件では4や5の評定が減って3の評定が増えてしまったのがわかる。しかも影響が大きいのは1年生である。このクラスの場合も、全般的には1年生より2、3年生の方が評価が高いという傾向があるが、細かく見ていくと、2、3年生で評定5の割合が評定3の割合より多いのに対し、1年生では評定5をつけた学生より、評定3をつけた学生の方が多くなっている。

学年を総合して、S条件とI条件を比べたのが FIGURE 5 である。筆者の学生時代は教室にエアコンなどないのがあたり前の時代で

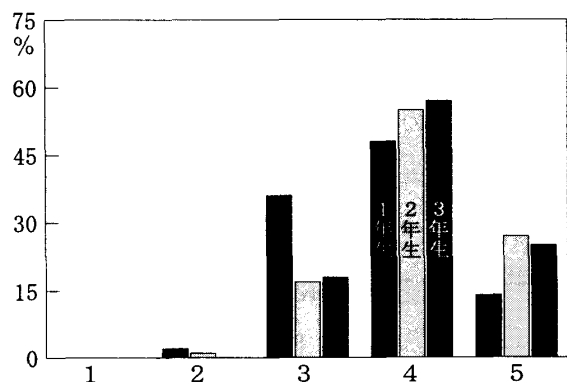


FIGURE 4 2001年度「教育心理学」(I条件) 総合評価の評定分布 (平均3.98)

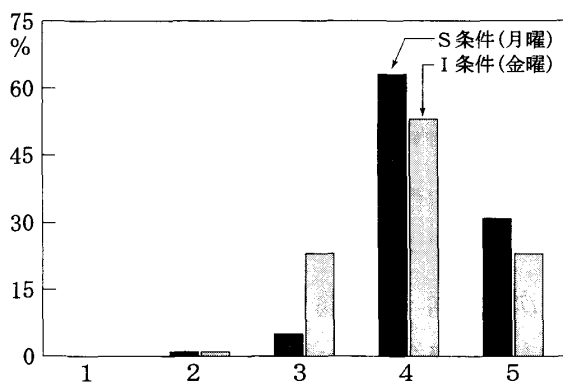


FIGURE 5 2000年度「教育心理学」総合評価 S条件とI条件の評定分布の比較

あったので、個人的には金曜の教室が特に劣悪な環境であると思わないが、現在の跡見学園女子大学は他のほとんどの科目がエアコン付きの教室で行われ、机もあり照明や音響上の不備もないことが当たり前になっているため、金曜のこの教室は、学生にとって恐ろしく劣悪な環境と認知されたと考えられる。そのことが、総合評定に影響しているのだ。

#### 6) 学生による評価観点の重視度

次に、観点別の評価の状況を見ていくことにする。評価時に、学生がどの観点を重視するかということは、授業運営を考える上で重要な情報である。今回は、重要と思われる5項目に回答してもらっているので、どの5項目を選んだかを調べると、重要視される観点がわかるようになっている。

FIGURE 6は、どれだけの学生がその項目を選んだかの割合を示している。76%もの学生が「色々考えさせられることが多い」という項目を選び、1位になった。

2位は「授業内容に興味もてる」という項目で73%、3位が「説明が理解しやすい」で69%、4位が「知的な好奇心が刺激される」で55%の学生が重要だと判断していた。

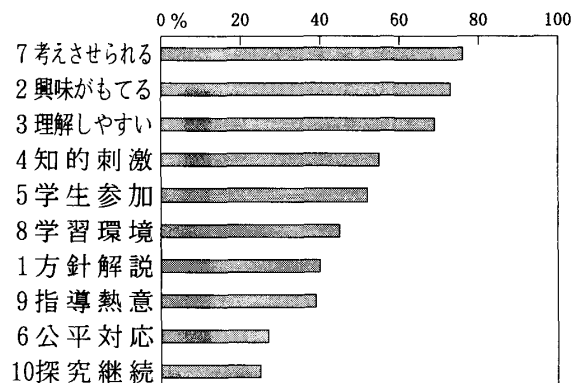


FIGURE 6 学生はどの評価項目を重視するか

安岡(1999)は、総合評価に最も影響を与える回答を見ることによって、大学生に重要視される観点は何であるかを探ろうとした。その結果、東海大学の学生に関しては「授業内容に興味もてる」が1位になった。跡見学園女子大学の結果でもこれは2位になっているので、「授業内容に興味もてる」ことは授業計画や指導案を考える上で、重要課題であることは間違いなからう。

筆者の立てた「色々考えさせられることが多い」という項目は、東海大学の評価用紙には含まれていない観点であるが、跡見学園女子大学では第1位になったので、学生の授業満足度を高めるためには、今後どの科目でも留意する必要があるであろう。

東海大学の調査では、「教師の授業に対する熱意を感じるか」が第4位で学生から重要視されていることになっているが、今回の跡見学園女子大学の場合は第8位となり、それ程重要視されていないという結果になった。安岡(1999)は、教師の熱意が上位に来ることの解釈として「大半の学生が受け身である」ことが原因だと考えている。もしこの解釈が正しいとするなら、跡見学園女子大学の



調査対象の学生は、より能動的に授業を受けていることになる。東海大学の調査の場合は全学生を対象にしているのに対し、筆者の調査対象は教職課程履修者になるので、大学の違いというよりは、むしろ「教育心理学」が資格科目であるという点が影響していると考えられるかもしれない。

### 7) 総合評価に影響する着眼点

総合評価を高くつけた学生と低くつけた学生では着眼点が異なっていたのであろうか。これを見るために、高い評価（評定5）をつけた学生と低い評価（評定3）をつけた学生がそれぞれ重要だとして選んだ観点を比較したのが、FIGURE 7である。評定3は、決して低い評価ではないが、評定の2や1の学生がほとんどいなかったため、評定の3の学生を低く評価したものとして扱った。

この図を見ると、上位5位まではほとんど差がないが6位以降に大きな差が出ている。すなわち、学習環境に着眼した学生は評価が低くなり、教師の熱意に着眼した学生は評価が高いという傾向が見られる。

教室内の受講者の学習動機は様々である。一般に、その分野に興味を持ち、内容を習得

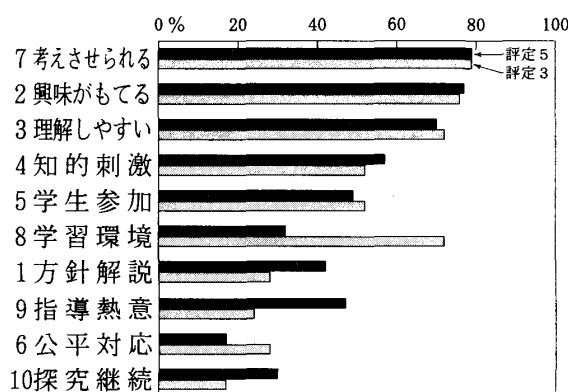


FIGURE 7 総合評価が高い者と低い者による観点の差

したいという目的で学習する場合、これを内発的に動機づけられていると言い、単位取得とか、他人との競争、賞賛を得る、報酬を得るなどの手段として学習する場合、これを外発的に動機づけられていると言う。こういう点から見ると、受講者の学習動機の内発的度合いは様々であるということができる。

その意味で、「更にこの分野を探究してみたいですか」という質問は、実は学生本人の内発的動機の程度を調べている質問である。従って、この観点を重要視するということは内発的動機を重要視するということになる。FIGURE 7の「探究継続」の棒の長さを見ると評定5の学生が評定3の学生よりも明らかに多いという傾向も出ている。

よって、受講者の内発的動機の程度が高いほど、授業を高く評価しやすいと言えるであろう。内発的動機の程度がそれ程高くない場合には、学習環境を重視するのも無理からぬことと言えるかもしれない。

### 8) 観点ごとの評価

① 考えさせられる授業 これは学生が最も重要だと判断した項目である。FIGURE 8から分かるように、6～7割の学生が評定5をつけ、評定平均はS条件が4.68で最も高くなった。金曜日の劣悪環境条件でも評定平均は4.53になり、S条件とI条件でほとんど差がなかった。学生が最も重視する側面であるから、筆者は授業実施者として評価が高いかどうかについて心配であったが、とりあえずは問題なさそうである。

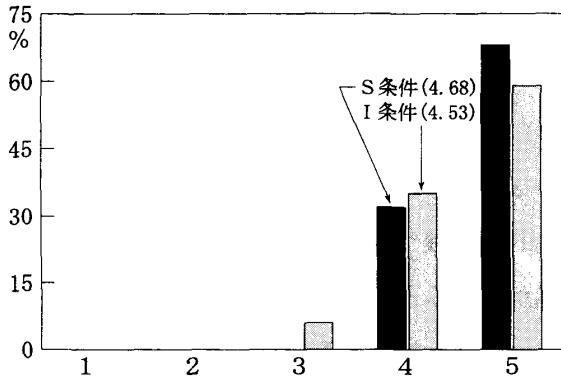


FIGURE 8 観点7「考えさせられる」に対する評価 S条件とI条件の分布

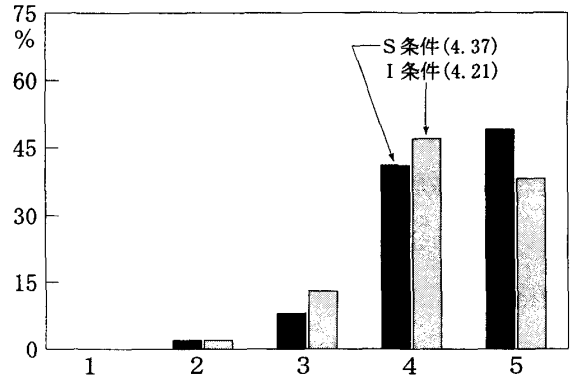


FIGURE 9 観点2「興味もてる」に対する評価 S条件とI条件の分布

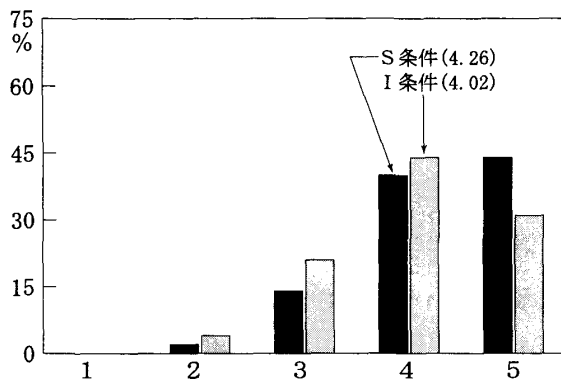


FIGURE 10 観点3「理解しやすい」に対する評価 S条件とI条件の分布

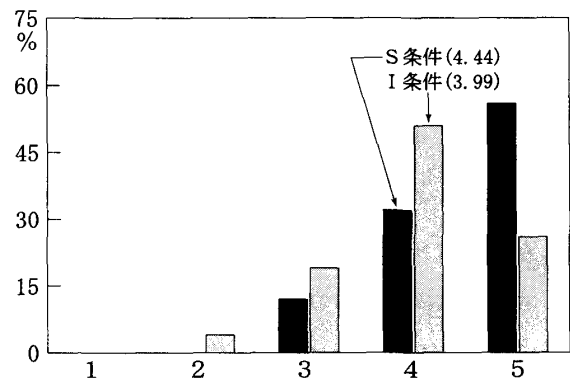


FIGURE 11 観点4「知的刺激」に対する評価 S条件とI条件の分布

②興味もてる授業 興味もてるかについては、FIGURE 9から分かるように、S条件は評価の5が最大になり、I条件は評価の4が最大になった。どちらの条件も、分布から見る限り9割方の学生は満足していると言える。

③理解しやすい授業 理解しやすいかどうかについては、FIGURE 10から分かるように、S条件とI条件で差が出た。講義内容も、説明の仕方も、進度も両者は同一なので、教室環境が影響したものと見られる。実際、工事の音がうるさかったりして、音声がよく聞き取れないためにわかりづらいという指摘が沢山あった。声が小さいという指摘も何回かあったが、マイクの音量はボリューム最大で

あったため手の打ちようがなかった。

④知的好奇心が刺激される授業 これは、S条件とI条件でかなり大きな差がでた。

(FIGURE 11) S条件に関しては評価5が最も多かったが、I条件に関しては評価4が多く、教室環境が諸に影響したと言える。知的好奇心の刺激に関する筆者の予想は、授業内容に大きく依存するので教室環境の影響はあまりないと思っていたが、教室環境の影響を大きく受けることがわかった。根性主義の教育観でなくても、教室環境の影響がしばしば過小評価されるが、このデータを見る限り、教室環境も重要であることがよく分かる。

⑤学生参加の授業 学生参加の双方向コミュニケーション授業というのが筆者の授業の特

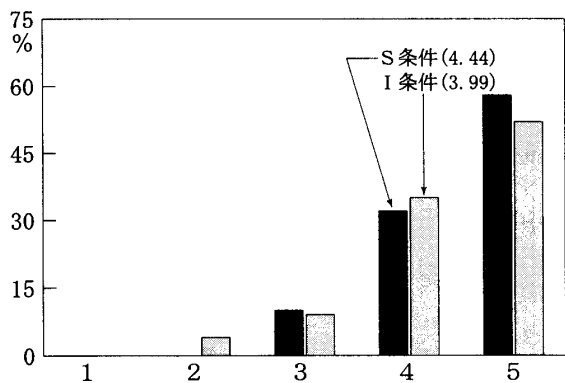


FIGURE12 観点5「学生参加」に対する評価 S条件とI条件の分布

長であるため、筆者としてはこれは高い評価が欲しかったが、こちらの期待通り評価5が最も多く、4と5をつけた学生が9割になった。(FIGURE12) この項目については、意外にも教室環境の影響を余り受けなかった。

⑥良好な学習環境 FIGURE13が示すように、S条件とI条件で最も大きな差が出た。S条件の授業では評価4の学生が最も多かったが、予想通りI条件の授業に関しては評価2が最も多くなった。評価1をつけた学生も10%にのぼる。一方で同じI条件の学生で評価5をつけた寛容な反応が8%もあったのは、驚くべきことである。質問の文は「教室内の雰囲気は良かったですか」と表現しており、物理的教室環境だけでなく学級風土(教室の人的雰囲気)で回答してもよいように作ってあったので、社会心理的雰囲気に着目して評価5をつけた可能性もある。この教室には授業の妨害要因が沢山あったのも事実であるが、それを克服するための思いやり行動が数多く発生したことも事実である。資料配布、答案回収、レポート点検等を、短時間で行うための協力が盛んに生まれたし、3年生が1年生を励ます場面もしばしば見受けられた。従って、

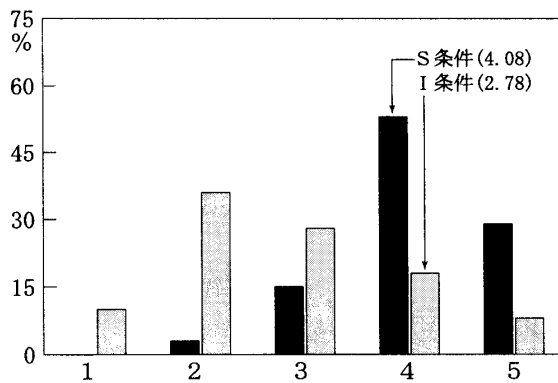


FIGURE13 観点8「学習環境」に対する評価 S条件とI条件の分布

物理的環境とは逆に、学級風土はかなり良好であった。その点に着目して回答したとすればあながち意外な回答とは言えない。

⑦方針が納得できる授業 筆者は授業改善の一環として、今年度から新たに初回の授業で授業方針の解説冊子を配付することにした。これには、授業の特徴・評価基準・学習の指針等が詳しく書かれている。これを重要項目として選んだのは1年生が31%(重要度8位)、2年生が44%(重要度6位)、3年生が38%(重要度5位)で、学年によって大きな差があり、順位が次第に上昇している傾向が見られた。方針の納得度合により学習方法が影響されるということが、大学1年ではまだあまり理解されないのに対し、2年生、3年

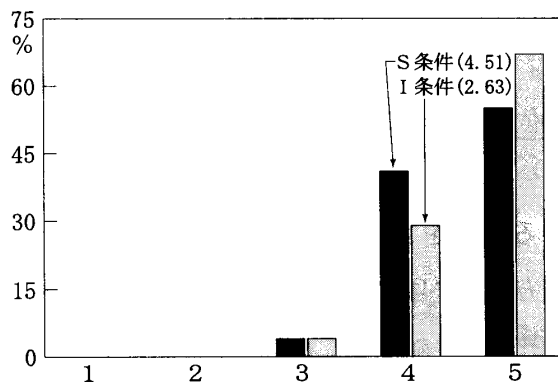


FIGURE14 観点1「方針解説」に対する評価 S条件とI条件の分布

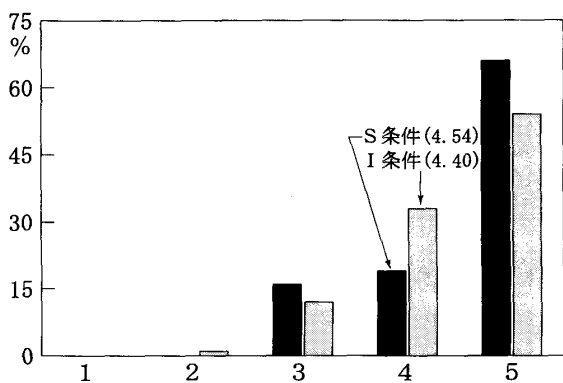


FIGURE15 観点9「指導熱意」に対する評価 S条件とI条件の分布

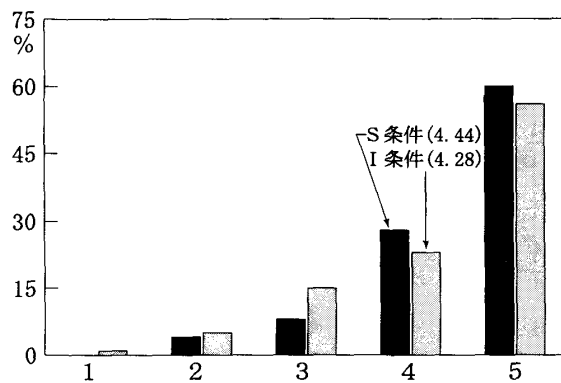


FIGURE16 観点6「公平対応」に対する評価 S条件とI条件の分布

生と進級する内に、方針を知っておくことの重要性が分かってくると考えられる。

この方針解説に対する評価はFIGURE14の通りである。S条件もI条件も評価5が最大値になった。やはり詳しい解説は好感を持って受け入れられたと考えて良いであろう。

**⑧教師の熱意が感じられる授業** FIGURE15が指導熱意に対する評価である。これはS条件もI条件も評価5が最大になった。評価平均値はS条件で4.54(第2位)I条件で4.40(第3位)であった。「熱意」は操作的定義のしにくい概念であるため、熱意が感じられるかどうかについてのこの質問項目は、教師の側が意図的に調節できない項目である。それだけに、筆者としてはこの評価の高さは事前に予測できなかったため、意外に感じられた。

**⑨依怙最良のない授業** 「教師はどの学生にも公平に接していましたか」という質問に対する回答をまとめたのがFIGURE16である。「方法」の項で述べたように、これは、いくら教師側が配慮しても誤解されやすく、不満発生の原因となることなので、それを解消するために入れた質問項目である。結果は全体

の約9割が評価5または4をつけ、評価平均値も高かったのでは誤解を生じなかったといえるであろう。ただ、若干数1や2をつけた学生もあり、何らかの不満を持ったと考えられるが、文章記述欄に説明のないものについては、教師側の原因把握が難しい。

依怙最良(えこひいき)に最も敏感な年齢は小学校高学年から中学生時代であり、大学生になるともはや重要視するとはいえないと事前予想したが、やはり重要度も9位で低かった。

**⑩更に探究を継続したくなる授業** 学生の重要度が最も低かったのがこの項目である。これは授業終了時の学生の内発的動機の程度を測定するのが目的で、質問項目の中に潜り込

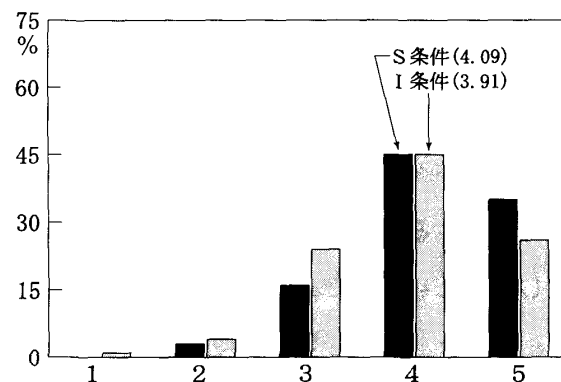


FIGURE17 観点10「探究継続」に対する評価 S条件とI条件の分布

ませることによって、筆者が自分で自分の授業を評価するために入れた項目といえる。もともと人の関心や興味は多様であるので、教育心理学の分野に対する全員の内発的動機を5のレベルまで持っていくことはできないだろうが、せめて半数ぐらいの学生の評定を4又は5にできればありがたいという位の希望を持っていた。実際には、約7割の学生が評定4又は5をつけたので、授業実施者としては、十分に満足の行く結果であったと思われる。

**⑩全項目のまとめ** 以上①～⑩で述べた各項目の結果をまとめてプロフィールを見ようとしたのが、FIGURE18である。これで見ると「方針解説」以外はすべて金曜の授業を表す点線のグラフが月曜の授業を表す実線のグラフより左側に位置しており、教室環境の影響がほぼすべての項目に影響していることがわかる。特に、知的好奇心の刺激に影響が大

きいのは致命的とも言えるであろう。もし可能ならば、今後はこのような事態が避けられることが望ましいことは言うまでもない。

### 9) 授業の特長は学生から認められたか

授業者側が授業の特長として意図的に強調したい点だが、学生から意図通りに高く評価されていない。授業は成功であったとは言えない。

「教育心理学」の授業の特長は、①双方向意見交換型授業 ②知的好奇心を刺激する授業 ③日常の実体験と学問を結びつけて考えさせる授業 ④詳しい授業方針の説明の4点であることは既に述べた。FIGURE18ではS条件受講生の質問項目に対する評定平均値が高い順に、項目を配列してある。指導熱意が2位に割り込んでしまったが、授業特長の4項目がいずれも上位に来たので、授業は成功であったといえるであろう。後は、この結果を学生に知らせることで授業満足度を高める必要があると考えられる。

さて、S条件とI条件のそれぞれの評定平均値の平均は、4.39と4.11であって、総合評価の評定平均値の4.24及び3.98とは一致していない。

総合評価には、当然学生自身の自己評価が含まれているからである。学生自身の自己評価を次に見ていくことにする。

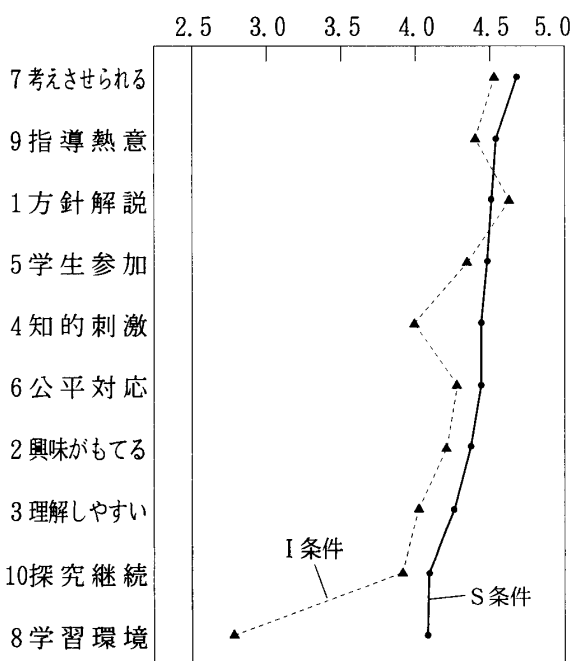


FIGURE18 観点別授業評価のプロフィール  
S条件とI条件の差

10) 学生の自己評価

①出席状況 FIGURE19は、学生の授業出席状況に対する評価である。これを見るかぎり、1年生が最も出席状況が良く、学年が上がるにつれて出席状況が悪くなるのがわかる。

②授業態度 FIGURE20は、学生の授業態度に関する自己評価を示している。出席状況評価では評定5が最大であったのに対し、この授業態度では最大が評定4になっており、学生は自分の授業態度はそれほど良いわけではないと認知している。学年別の差はあまり目立たないが、評定平均で見ると、学年が上がるにつれて授業態度が少しずつ悪くなっていくようだ。教室で教えている筆者の印象としては、特に上の学年ほど授業態度が悪いよ

うには見えない。

③家庭学習 家庭学習の程度を評価した結果がFIGURE21である。最近の学生は家庭学習をほとんどしなくなった印象を筆者は持っているが、FIGURE21を見る限り学生自身もそれを認めているように見える。授業に参加しているだけで、家庭での習得のための努力をあまりしていない。その結果単位が取得できなくなって、再履修という羽目になる者が出るのだ。学年が上がるにつれて学習不足を認識し、家庭学習をするようになるという様子が、このFIGURE21からもよくわかる。「教育心理学」は教職の必修科目であり、受講生は将来教師になった時に生徒に学習をさせる役割を持つことになる。従って自発的学習の価値を体験的に認識していないと、将来の担当生徒にも「強制された時だけ学習する」という姿勢を植えつけてしまう可能性が増すので、学習不十分のまま単位を認定するわけにも行かず、再履修の学生を多く受け入れざるを得ないのが、この科目の現状である。この方針は支持する学生が多く、学習不十分が少しずつ改善されて良かったという感想が毎年多く寄せられている。

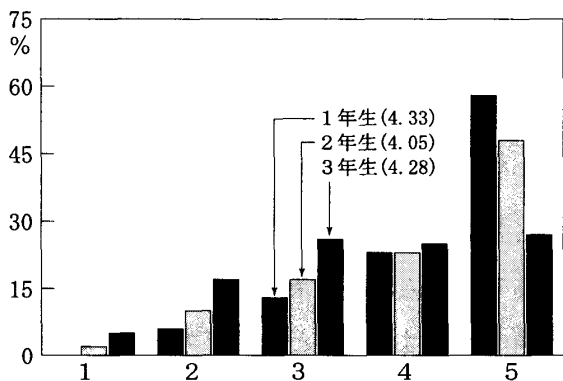


FIGURE19 学年別の「出席状況」に関する学生自己評定

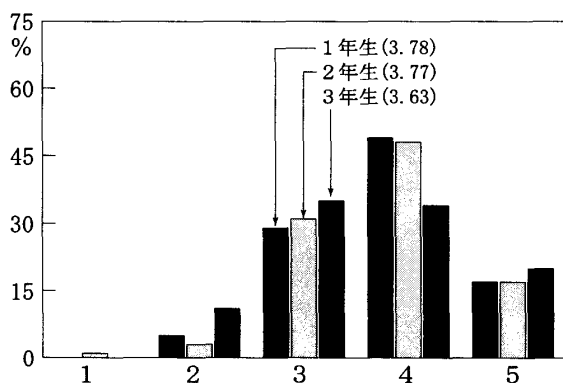


FIGURE20 学年別の「授業態度」に関する学生自己評定

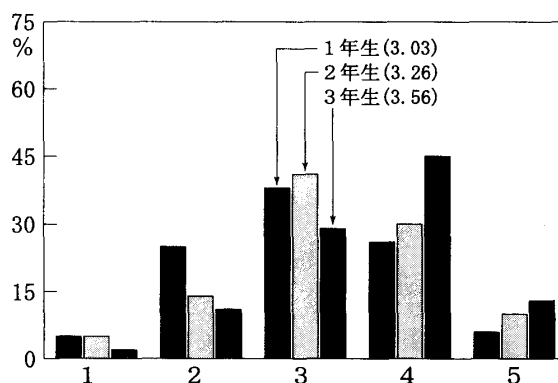


FIGURE21 学年別の「家庭学習」に関する学生自己評定

④試験準備 試験準備に関する回答の集計結果は、FIGURE22に示されている。これは、「家庭学習」の結果とほぼ同傾向であった。ただし、評定平均値は家庭学習よりもどの学年も上回っているため、平常学習よりは試験準備に力を入れていることがわかる。

1年生と2年生はグラフの最大値が評定3である。これに対し3年生は最大値が評定4になっており、3年生が最もよく試験準備をしている。これは跡見学園女子大学の場合、「教育心理学」を含めたいくつかの科目の単位が3年終了時までにとれていないと、教育実習ができないようになってきているため、3年になってやっと重い腰を上げた結果と見ることができよう。

従って、この授業の最大の課題は、1年生の段階からいかに自発的に学習するようにしむけるかということである。

⑤まとめ 以上の4項目をプロフィールがわかるようにまとめたのがFIGURE23である。授業評価のプロフィールと同じように、S条件を実線、I条件を破線で表した。4項目中3項目までが教室環境の影響を若干受けたように見えるが、それほど大きな差ではない。

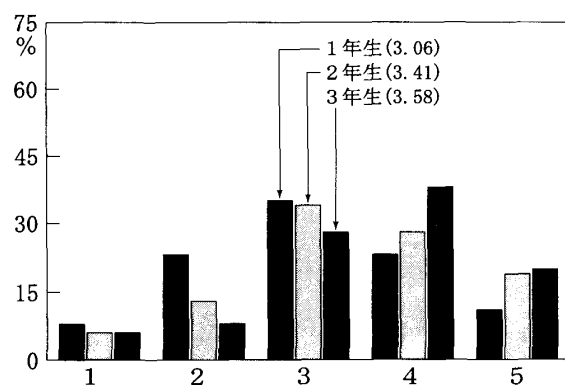


FIGURE22 学年別の「試験準備」に関する学生自己評定

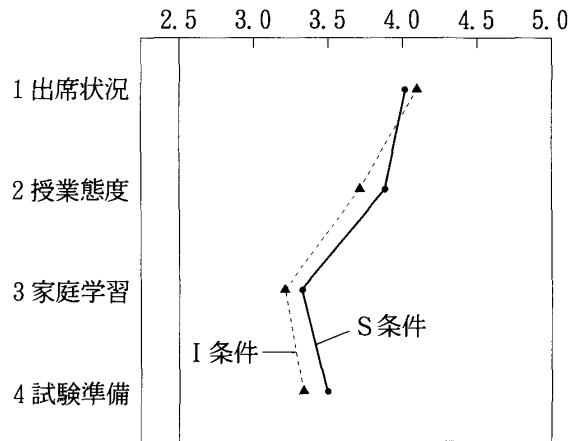


FIGURE23 観点別自己評定のプロフィール S条件とI条件の差

全体的には、「授業にきちんと出てまずまずの授業態度ではあるが、家庭での自発的学習は充分でなく、試験前に少しだけ力を入れる」という姿が見えてくる。

## 結 論

「教育心理学」という科目の授業で、学生による授業評価を実施した。評定尺度法による評価と自由記述による評価を併用したが、評定尺度法の部分だけでもかなり沢山の情報が得られた。本研究は、評定尺度法によって得られたことの報告である。

わかったことは以下の通りである。

1) 学生の総合評価は、授業だけでなく学生自身の自己評価まで含まれている。授業は教師と学習者で成り立っているため当たり前のことではあるが、大学の教師が授業評価について話題にする時にはしばしばこのことが忘れられ、教師評価と混同されることが多い。その点学生が授業評価をする時には、特に断らなくても、トータルで評価している。

2) 授業評価に関しては、学生は全般的に高

い評価をつけておおむね好意的である。

授業を進めて行くにあたって、学生は実に協力的である。そのために教師の側の工夫や意図が十分に活かされやすい。これは、大学の同僚からもよく聞く話であるので、現在大学の学校風土が健全に確立しているためだと思われる。他の教師の授業に対する努力の相乗効果と思われる。

3) 受講者は、教師が強調したい授業の特長を正確に把握し、学年が上がるほど授業の評価が高くなっている。

教師の意図と学生の認知に齟齬があると、授業目標が達成できないが、学生の適応性が十分に機能している。

4) 評価の観点としては、①考えさせられる授業②興味がもてる授業③理解しやすい授業④知的好奇心が刺激される授業であるかどうかを、学生は最も重視していた。

5) 評価の高い人は教師の熱意に注目しており、低い人は教室環境に注目している。

これも学生の協力の結果だと思われる。

6) 教室環境の問題点は、知的好奇心の刺激される度合いに最も影響を及ぼす。

今回は、図らずも同一授業を教室環境を変えて並行実施することができた。好ましくない教室環境の授業を受講することになった学生には気の毒であるが、教室環境は色々な側

面にマイナスの影響を与えた。

しかしながら、悪い環境の教室には連帯と協力が生まれ、学生同士や、学生と教員の人間関係は、環境の良い教室よりも良好であった。更に、両方の教室の試験結果を見ると、成績には有意差が見られなかった。これは学生にも教師にも強く存在した悪い環境を何とか克服したいという気持ちが、環境条件をカバーしたからと言えるかもしれない。

このように教育の場面では、一見良くないことが結局はプラスの結果をもたらしたり、良いと思ってやったことが、最悪の事態をもたらしたりすることがあり、そこに教育の奥の深さと面白さがある。

#### 引用文献

福岡教育大学教育学部附属福岡中学校 1985

「個のよさ」を伸ばす授業の展開 明治図書.

Thomas, J. D. 1976 Accuracy of self-assessment of on-task behavior by elementary school children. *Journal of Applied Behavior Analysis*, 9, 209-210.

安岡高志 1999 それはたった4人から始まった安岡・滝本・三田・香取・生駒 授業を変えれば大学は変わる プレジデント社 7-64. (2001, 11, 21 受理)



TABLE 2 授業評価用紙

授業評価用紙		2001年 月 日		科目名		
責任ある評価をして頂くため記名式ですが、成績評定には影響しません。						
曜日受講	学科	学年	組	番	氏名	
質問項目		強くそ う思う /優良	ややそ う思う /良	どちら も いい /普通	あまり 思わ ない /不良	全くそ 思わ ない /最悪
以下の各質問に5点法でマークして下さい。マークは○をB又はHBで●に塗りつぶして下さい。						
自己 評価	1) 出席状況は良かったですか?	⑤	④	③	②	①
	2) 受講態度は良かったですか?	⑤	④	③	②	①
	3) 習得のための自宅学習はしましたか?	⑤	④	③	②	①
	4) テスト準備は最善を尽くしましたか?	⑤	④	③	②	①
↓ 1~10から重要な5つを選んでそのみ評定						
教員 に 対 す る 評 価	1) 詳しい授業方針の説明はありましたか?	⑤	④	③	②	①
	2) 授業内容に興味がもてましたか?	⑤	④	③	②	①
	3) 説明は理解しやすかったですか?	⑤	④	③	②	①
	4) 知的好奇心は刺激されましたか?	⑤	④	③	②	①
	5) 学生の意見や感想を聴く努力を積極的にしていましたか?	⑤	④	③	②	①
	6) どの学生にも公平に接していましたか?	⑤	④	③	②	①
	7) 色々考えさせられる事は多かったですか?	⑤	④	③	②	①
	8) 教室内の雰囲気は良かったですか?	⑤	④	③	②	①
	9) 授業に対する熱意を感じましたか?	⑤	④	③	②	①
	10) 更にこの分野を探究してみたいですか?	⑤	④	③	②	①
この授業に対する総合評価を示して下さい。		⑤	④	③	②	①
以下には授業の感想を自由に書いて下さい。						
ここに書かれたことに対し返事は (㊟欲しい、㊤いらない、㊣どちらでも良い)。 ↓正確に						
②の場合 → { 100字以内でよい → メールアドレスを書いて下さい。 詳しい返事が欲しい → 携帯番号を書いて下さい。 ゆっくり話がしたい → 研究室にお越し下さい。(予約をお願いします)						